

寛政元年における上矢敲氷

清水茂夫

一 俳諧生活の実態

天明九己酉（一七八九）の年には、上矢敲氷は、五八歳であった。明和六己丑（一七六九）の年、三七歳の時、「己丑のとし初懷紙」に年抄の吟として「一子なるものになりはひの事打ちまかせて世の外に遊ばんとするもおかしくて　△足ることは知らで済すや年の暮△と吟じ、長男花青に家業を任せた後は俳諧の宗匠としての修業と指導とに精進を続けて二〇年を経過した。今は老熟した宗匠として活動が続けるのであるが、その実態を明らかにしてみたいと思う。天明九年は一月二五日に寛政元年と改号されるので、この一年を寛政元年として記述して行くことにする。幸いに敲氷の日記である座右稿は天明九年新春から始まるもの、寛政元年孟夏から始まるもの、同孟秋から始まるものが残されているので寛政元年を通して敲氷の俳諧活動を概観することができる。（一）の中には月日を記し、敲氷の吟は皆記載したが、俳諧活動に関係ある俳人の訪問は来訪とし、通りすがりの訪問は省略するか、過訪と記した。

（元旦）閑居試筆「万歳よはしら少なき庵も訪へ　敲氷」万歳は正

月を色どる風俗で、太夫と才藏の二人組みで、主役である太夫は鼓をうつ才藏の楽に応じて舞をまい、また共に歌ったり祝をのべたりする。大江丸の句に「万歳がほめし柱に梅活けむ」などとなることからすれば家の柱をはめることもあったろう。敲氷は、柱も少ない庵ではあるが万歳よ立ち寄ってくれよと呼びかけているのである。二年前の元旦の句にも「古庵のひづみ直さん飴縄　敲氷」と吟じているが、年月を経て古びた庵が心に懸っているようである。

（二日）春興十句、

- （一）神風の出雲や今も八重がすみ　　氷
- （二）朝市に待つ久しきや鶯菜　　　同
- （三）荒磯の砂打払ふ干鰯哉　　　同
- （四）春雨や獅子舞の宿さはがしき　同
- （五）藁門に栽植したる柳哉　　　同
- （六）小式部が住し跡にも桜の花　　　同
- （七）うぐひすや今朝おぼろげに見たばかり　同
- （八）若草に牛黒々と夜明かな　　　同
- （九）火とぼしの傘すぼめゆく柳哉　　同

(10) 山梨神宮へ贈る。粥占やまだ見ぬ秋の脈はしき 同

(1) は有名な須佐之男命が出雲に須賀宮を建てられた時、地から雲の立ち昇るを見て「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」と歌われた、その出雲の国を思い浮かべ、新年の今、出雲には八重垣のように雲がたなびいていることだろうと吟じたのである。師の加賀美光章から学んだ神道が影響していると思われる。

(6) の小式部は平安時代の歌人、母は和泉式部。万寿二年(一一〇二)十一月、二八歳前後で没した。夭折しながら幾人かの公達に求愛されたのは、中宮彰子に出仕し社交の場において魅力的な才媛であったからであろう。その小式部の家跡に花開く桜を思い浮かべているのである。歌学などにも造詣が深いので、「小倉百人一首」にある小式部の「大江山いくの道の遠ければまだふみもみず天の橋立」などは当然意識しての句であろう。その他の句は日常生活の中から生まれた句であって素直で新春の感情がにじみでている。

(三三) 「田龍七十初度」の句題は田龍の七十回めの誕生日の意味である。「初度」は『楚辞』の離騷編を出典とする。その誕生日を祝している。「春ごとに聞けや齢も百千鳥 氷」と吟じた。百千鳥の意味は沢山の千鳥と解すると、季語としては冬となり、新春には不適当である。百千鳥を沢山の鶯の意にとると新春に適合する。この句では後の解釈をとって、これからは沢山の春の鶯の声を聞き重ねて百歳も千歳も御長命でお過ごし下さいという祝賀の句とみる方がよい。(四四) 「神内川奥山氏八十賀、春祝といふことを、色まして猶幾春も生の松 氷」と吟じた。この句も新春の喜びに当たり、奥山氏の八十歳を祝って吟じた句である。松が春を迎え緑を濃くして成長するように、更に八十歳の上に元気で何年もお暮し下さ

いの意である。(五日) 縣令黒川来訪。県令は代官の称で、敲氷が、甲斐の国内にあった代官所の代官や役人と親交があった事も、俳諧活動の支えとなっている。(六日) 「栗雪や升に積らばいかばかり 氷」(八日) 加茂(現春日居町) 梅花斎初会」。梅花斎の許で天明九年の最初の会が催され、敲氷が指導に赴いたのである。(一二日) 初会百韻興行、連衆三一人。「庫裏の夜は粥から明けて梅の花 抱山字」「解くる覧に本末の水 氷」。抱山字は敲氷の師である門瑟の別号である。敲氷は師の発句を貰い、それに脇を自分で付けて、平橋庵での最初の例会の百韻興行を催したのである。この発句で寺の庫裏では朝食の粥を食べている間に夜が明けて、眺める庭には梅がよい香を放って咲いている光景を表し、発句に付けて屋根の雪が解けて水が大小の流れをなして懸樋に落ち込む情景としたのである。残りの付句は敲氷と連衆三一人で順に付けるのである。敲氷の師を尊びその俳諧に学ぼうとする姿勢が感じられる。

(一三日) 牧笛庵へ行く。(一五日) 信州伊那郡原村の林茂太夫が、古川阿老の文を携えて来訪。東武へ赴くとの由。古川阿老は敲氷の俳友である。(一六日) 上諏訪の乗松礎八来訪、七〇の年賀の句を所望する。(二七日) 蔵六来訪、「荒礎は松に隔てて柳かな 蔵六」「はたご屋の間毎吹せつ梅の風 同」(廿日) 柊里来訪。「句ふから尋ねあたるや梅の花 柊里」「まだ春しらぬ雪の山陰 氷」「春興 早蕨の拳ゆるむや春の雨 柊里」「普請場に結び捨たる柳哉 氷」(廿四日) 富田山主(寿徳院、曹洞宗)が『蒙求』(史書、唐の季辭著)を携えて来る。「うかひ山初会(鶴飼山遠妙寺内で催された例会)で各々玄鳥の題、「衣張にさはらで出入燕哉 氷」(廿六日) 風恵坊来訪、駿河に赴く由。午時過岩泉山(光福寺 横根村に

あり浄土宗。敲氷家の墓所がある。向富山（逍遙院、曹洞宗、桜井村にある）に年礼に行く。童歳来訪。「雪解の土試みる玄鳥哉 童歳」「燕や一日に海何千里 同」。（廿八日）午時より風起こり余寒甚だし。府下へ行き夜に入りて帰庵する。「春雨や烟かけまはる爺が夢 氷」「蛸の出て人怖しけり隴月 氷」（廿九日）「つくはねの音も冴えけり竹瓦 桑里来訪」。（晦日）風恵坊の令郎が駿河安部の郡斎（郡役所）におり、迎えをよこしたので別れを告げたのを送って「かしの梅の雪に似たらんもをかしからめど、此の地の雪の梅に似たるもはた見捨てがたくうしろ髪ならずや。富士川の岩なみはやく、行く船に祖坐の盃もめぐる事又すみやかなり。旅笠の行衛や富士の横霞 氷」令息の許に落ちつく風恵坊の心をも思いやった送別吟である。これに対して鳥仙の老いた、禪門に入った父の死を悼んでは「春寒し坐禅衾も記念わけ 氷」と吟じた。坐禅衾は坐禅をする時に着る小袖である。今はなき鳥仙の祖父の生前坐禅していた姿を想い浮かべ、その小袖を形見分けする親子たちの悲しみを的確にとらえている。

（二月二日）文通「叱っては馬牽向かす野分哉 青鳥」（六日）昨夕より祖父五〇回忌、午時より岩泉山へ参詣す」（七日）「初午や子供頭に成りて出む 氷」初午は陰曆二月初の午の日で、この日を祭日として稲荷神社などの祭が盛んに行われた。集落には子供組があり、その頭を子供頭と言って祭を支配するのであった。恐らく敲氷も祭を見物する中に、自分も一度若がえって子供頭になって祭を存分に楽しみたいと感じての句であろう。（八日）今宵後藤氏の許へ行き夜話。日記の中に「夜話」の語がしばしば見える。禅宗関係では、夜の修行のためにする訓話を夜話と言っているし、一

般にも夜ばなしを筆記した書物に夜話と題しているものがある。敲氷の夜話も単なる世間話ではなく俳諧・漢籍・古典などだけでなく、広く学問や人生の問題をも話題としたように思われる。文通で「山越えて梅の薫るや春の風 孤峰」「堀越しに聞く鶯の初音哉 白里」（一〇日）「一盛り引手あまたのよめ菜哉 童歳」「柳は洗ひ髪の霽 氷」を発句・脇として両吟歌仙を興行した。（一二日）定会で、「苗代や苦はほどもなく樂の種 氷」を発句として百韻興行。連衆は一七人である。（一三日）葛飾の再蝶から去る一〇日着の文通で「伸び伸びて結ぶ柳や丸木橋 再蝶」「杖曳けば蛙の音や隴月 同」「先三日眼鏡はいらず初曆 米珠」「水底へ影は届かず隴月 乱竿」「誰が子ぞ初商に薺壳 抱山宇」等を送って来た。（一四日）甫秋来訪。「降りそうな空にもあらず隴月 甫秋」「暑き日や駕に倦み又馬に倦み 同」など持参。（一五日）柊里が来訪し「涅槃会や庫裏では猫が昼寝する」という発句を吟ずると敲氷は「日はうらうらと座具に梅が香」と付句する。続けて、元斎・素隣らが訪れて歌仙興行に展開した。夜には素毛が来訪して又歌仙一折が興行された。「寝た竹も起きるにけふの涅槃哉 素毛」「経高らかに園の鶯 氷」と付句する。涅槃会は春二月一五日釈尊の入滅の日に、報恩のために寺々で行われる法会で本堂には涅槃像がかざられ、遺教経を誦したり涅槃講式などがよまれたりする。寺によっては餅や団子をまいたりするので子供達にとっても楽しい春の一日である。五十八歳を迎え、仏教に深く心を寄せている敲氷にとっては貴重な一日であったに違いない。記述の発句「日はうらうらと座具に梅が香」や「菜の花の黄金光る涅槃哉」の句などに涅槃像に対しての充足した敲氷の心を感じとることができよう。

(一六日) 柳美来訪、「梅咲くや火宅の沙婆と思はれず 柳美」
「なきがらを極彩色や涅槃像 同」。これも敲水の指導を求めて訪れたのである。(一七日) 池月堂のあるじが来訪し、古い懸物の歌について語る。その歌は「けづりおく茶杓の竹のかひあらば我が後の世をすくひ玉へや 玄旨法師」「物の中にひとりすぐなる身を持ちて我をゆがめる竹のふし哉 沢庵和尚」「ゆがまする人にまかせてゆがむなり、是もすぐなる竹のところに 宗圃居士」であった。人生の生き方を教える歌であるが、敲水は洩らさず書留めている。玄旨は和歌・連歌の作者の上に歌学・古典に通じていた。沢庵和尚は臨済宗の僧、紫衣事件で幕府と抗争し出羽に配流されたが、赦されて帰洛し後水尾天皇に原人論を講じ、徳川家光の帰依を得て品川に東海寺を開いた。宗圃は重徳編『俳諧塵塚』に見える和漢八吟の作者である。二窓の書信で「梅が香や折折東風の運ぶ頃」「生酔の道面白し臘月」の二句が居く。(廿日) 八代(現八代町)に行き夕暮帰庵すると前夜求古が宿泊しており、「花の為降るならば降れ春の雨 求古」を示され、敲水は「花のため雨祈る客留めにけり 水」と応じている。門弟に対する暖かい心が推察できよう。(廿一日) 荆沢(現甲西町)市川渭川来訪。「春雨に打たれて開く木の芽哉」と発句を吟ずると、敲水は「学びの窓に鳥の囀り」と脇を付け、両吟歌仙一折を興行した。五民からの文通には「うぐひすや起き」ころよき昨日今日 五民」「鶯や来て誘ひ出す旅ごころ 同」の二句が記されていた。(廿四日) 藤之木(現御坂町)の梶原氏が来り発句を所望した。(廿五日) 三洞庵で聖廟法案があり、百韻が興行された。各々松・柏の発句に、「二度見たといふは虚なり松の花 水」(廿六日) 昨夕より求鳳亭で年回法筵に招かれた。小池(琴河)氏

来訪。琴河は正俊、字は子鶴とも称し、上矢作村(現一宮町)に家塾を開いた。詩文は大儒古賀精里を驚かしたという詩人。郷学由学館の初代教授となった。亀石から出版した小篇が到着した。(廿七日) 藤崎(現大月市)連中の代表が入来した。山梨(現山梨市)へ行き、夕方帰庵。(廿八日) 柊里亭(北堂)に招かれて、「竹の子も芽を出している雪解哉 水」と吟じた。(晦日) 前夜から風邪のため終日平臥。谷水来訪「句作の思ふまゝなり春の雨 谷水」(三月二日) 風恵坊駿河着後の用事の文通来る。(三日) 「松風に通うて鳴らせ雛の琴 水」。三月三日の雛祭もかなり盛大になって来たようである。また、岡山古ぬしが一女子をもうけ、初めてする雛遊びを祝って「長かれよちとせももせ桃の花」と祝いの句を贈っている。其有長兄が春の錦の都に赴くに当たり送別の句「柳さくらこきまぜてけさわがねけり」と吟じた。「わがねけり」は輪の形にたばねて贈りますの意味である。(四月) 湯沢(現甲西町)の和狂(本名依田官蔵)が持参した句「覗くなと呵つてのぞく接木哉」。初心者の幼稚な句でも記し止めているのは、門弟を育てる上で、その実態をとらえる必要からであろう。(五日) 白桂の内人(妻である)の病を訪うている。夕陽帰庵。(七日) 春沢からの来信に「苗代や牛のようななる石一ツ」「鍋一つ浸した中に落椿」の二句。(八日) 川中島(現石和町)の閻魔堂奉納跋を白亀の勸進に応じて「うそ鳥よ虚言囀らば舌ぬかむ 水」(一〇日) 尺五からの文通に「似た顔の一人も見えず涅槃像 尺五」 柏下坊は去月廿五日に卒した。草風は去年の夏、釈氏の姿となって芥子の実の一句を吟じ、自ら柏下坊を称し、信心怠りなく勤めたのに今年如月の頃から何となく睡眠におかされる状態であったが、安楽国(極楽)に赴かれた。

彼岸の半ばばかりの日であるのは、恭ない終わりであったと述べ、「名残をしき御文や帰る雁の声 氷」と吟じた。(一二日) 定会百韻興行、連衆一六人。「梅津にも梅より多し桃の花 氷」(二三日) 藤ノ木(現御坂町)の梶原氏来訪して自画讃を所望する。北山禪林使僧風條五民来訪。元ざね城南よりの帰途立ち寄り黄昏に及んだ。春沢の文通に「念仏のかねには散らぬ桜哉」「永日や雨も二三度降り休む」の句があり、(一四日) 今日、石和・二宮・八代を経回り夜に入りて帰庵。(一六日) 山梨の一丘閣を訪れる。午時庵に帰ると、元ざねから消息があつて招かれた。夜歌仙興行の発句は「翌という我が愚かさよさくら狩」であつたが、この句は過日武州の人々に求められて贈つた句である。(一八日) 運水の書簡に「鶯の岩の屏風へ飛んで行く」「人知らで花になりけらし落の臺」の二句があつた。(一九日) 亀石が東屋社奉納額を携えて来訪したので、その跋として「行幸から道開けたり山桜」を奉納した。三峰の新井理兵衛が来て、三峰の人々の短冊の所望を訴える。(廿日) 山梨御神楽(春日居町鎮目の山梨岡神社の太々神楽)に参詣して「庭燎かと見まがう岡のつじ哉 氷」「おもしろや花降かゝる御忌衣 同」の句を吟じた。(廿一日) 善光寺に参詣する。古尺来訪する。「春雨や月もほのかに有ながら 古尺」「出ぎらひと隣歩行や春の雨 同」「盛りにも訪ふ人稀に梨の花 同」(廿三日) 求風同伴で八代に行く。夜移里亭で三吟興行をする。(廿四日) 庄木社奉納和好勧進に応じて「桃の花折かけ筒のみきの口 敲氷」を奉納した。(廿六日) 仲亮来訪し「はな紙の間に幅紗と葦哉 仲亮」の句があつた。筑路が願主の御嶽山奉納に「神垣や盛り幾日の峰の花 氷」を吟じた。(廿七日) 池水が同庚(同年齢)の老人と同伴で、信州善光寺参詣

の旅立ちで来訪したので「散る花をとめく行けよ阿みだ笠 氷」の句を贈つた。(廿八日) 岩泉山へ参詣。(廿九日) 去る廿一日白桂の婦人が没したのを悼み、「摘むを見ても袖しぼるらし桑の露」を贈つた。弄花編の小篇巻軸に「植多し人の碑建てん山ざくら 氷」が入句した。

(四月朔日)「青竹の杖心地よし更衣 氷」(三日) 昨夕から山鶏大詳忌法筵を催す。(四日)「今獨活はる山やほととぎす 氷」夜来雪亭に招かれて歌仙興行。巴人の子が駿河国よりのかへさ阿部の山中の名だたるもの贈られたので、昨日の雨のつれづれに取り出し、盧同の趣にならい、「いざ新茶煮て一碗に一句づつ」と口号して好意にむくいた。盧同は学を好み博覧強記であつたが、仕進の意なく、少室山に隠れた。性茶を好み、孟諫議が茶を恵んだのを謝して歌を作つた。韓愈が盧同の月飾の詩に感じて称賛の詩を作っている。敲氷はこの盧同の行為を盧同の趣として真似たのである。敲氷の漢詩文に通じていた一つの証拠となるであろう。(五日) 天目山人入来。天目は志村礼助、諱を益之字は子謙と称し、加賀美光章に学んだ。漢学書道にも通じ、手島堵庵系の心学により忠教舎を現一宮町の末木に設け、社会教育に尽くした人で、共に光章に学んだこともあつて敲氷と親交を続けている。(六日) 午後から子供同伴で岩泉山へ参詣し、つじ・わらびを取つて帰る。(七日) 善光寺参詣。書信で仲亮より「上下の髪積もきれいに更衣」の句到来。百童書信、「盗人に是もとらせよ衣がえ 百童」(八日)「誰れ見ても似た顔はなし仏生会 氷」(九日) 昨夕牛歩居士十三回忌に招かれた。「牛歩居士はひたぶるに酒をたしなみて下戸なるものを罵りたりしが、無くてぞ人は恋してふことむべなり、へ紅葉焚しむかし語や夏

木立 氷」(一二日) 定会百韻興行。(一八日) 阿老からの文通

「静さや雲の音きく枯かしは 阿老」 「桃咲て酒売る家や藪の中
同」(廿七日) 引蝶来訪、「一声を聞けばなつかし時鳥 引蝶」

(廿九日) 「殖よてもすわる庵の茶筵 氷」(卅日) 八代へ行く。

(五月五日) 官友舎の諸子に誘われて、岩泉山の大悲園に詣で、歌
仙一折興行する。「軒に茸く草や折交まさしも草 氷」さしも草はよ
もぎのことで、五月五日の節句にはよもぎや菖蒲を軒にさした。菖
蒲をさすのは中国の民俗信仰が日本に伝来したもので、菖蒲は薬草
で繁殖甚だしく陽性のものだから陰性の悪魔を払う力があるとされ
ていた。もよぎも同様に毒気を払うものとされていた。(八日) 今
夜草庵に螢を眺めて夜間に及んだ。その折の句「水に遊び水にくだ
けて飛ぶ螢 柸里」 「箴帆の入舟照らすはたる哉 元ざね」(一二
日) 月並百韻興行。(廿日) 求鳳亭で昼晡する。(廿三日) 青羊来
訪する。(廿五日) 古尺本月一日抱山宇を出奔の由老師から文通
があり、下女あき方からも告げて来た。古尺から敲氷宛の手紙には
「散際もとがくしさや茨の花 古尺」 「故郷の空なつかしや時鳥
同」の句があり、古尺は故郷へ赴いたらしい。敲氷は老いた師の
身辺におこる事件にも心を痛めずにはいらなかった。(廿九日)
守黒忌追善五十韻を興行する。「時鳥を音楽になずらへ、茄子を百
味としてお供えするもの、守黒庵柳居の教えたさびしみの心を以て
祭るのであらう」と述べ、「摘て来る夏花の籠かごに茄子なすび」を発句と
し、「道一筋のふもと涼しき 鬼孫」を脇句として五〇韻が興行さ
れた。文通で「むら雨の柏ならして杜宇 石牙」 「かんこ鳥老いし
ものかと思はるる 同」の二句が届く。

(六月七日) 白野(現大月市) 天満宮奉納句を黒野田白野連中の需

めに応じた。(一二日) 定会百韻興行する。「咲き乱す昼顔は日に
もまれけり 氷」(廿二日) 八代へ行く。(廿四日) 運水来訪、
「短夜や堅き枕に気も付かず 運水」 「橘守に聞けば深けたり夏の
月 同」(晦日) 露散のさかさまな喪に、寝て眠る事のできない程
歎かれるというのを聞いて、昔唐の東門呉という人の子を失った時、
慰める人に対して「我もと子なき時は患えず、今子みまかり侍るも
持たらぬ折と同じ様也」と、語った。此の例に習って悲しみをなぐ
さみ給へと申し贈って「無限樹の風にかはかせ夏ごろも 氷」の句
を添えている。

(閏六月一日) 拾露・自徳文通に「紙屑の中に見付けし螢哉 拾
露」 「業平の手にもふれてや奈良久ちは 同」 諏訪自徳文通「青梅
に立尽したる女哉 自徳」(二日) 月並百韻興行。(廿日) 霜後・
乱竿文通「世は青き草木の中や紅の花 霜後」 「蟬なくや赤き花さ
く寺の内 同」 「夕顔や昼は通らぬ穢多の門 同」 「待ちて寝ず啼
きて寝させずほととぎす 乱竿」(七月朔日) 引蝶来訪。(二日)
月次百韻興行 十五人」(七日) 「秋立や世に捨てられし竹婦人
引蝶」(九日) 四日市(現石和町)の和笑勸進で諏訪神社奉納「野
分にも動きはせじな御柱 氷」 柸里子は家とじ年頃心結ばふれる病
ありければ、こたび信濃の国伊奈のいでゆに連立ち赴かれる。かし
こは園原山もほど近き由聞侍りて旅立をことぶきける。「長生もと
くさ刈る人にあやからん 氷」(十一日) 夕暮吟朝入来。七日に東
武より帰った由、葛飾の老師(門瑟)の老身の事などつとつと物語
りを聞いて安堵する。(一二日) 巴人亭で歌仙一折興行、夜三更に
及んで帰庵する。

(一四日) 今朝横根・桜井の寺詣でする。(一五日) 藏六善光寺詣で

して過訪。「今やひく駒の茄子に盆の月 水」「代々の器磨くやた

ま祭 同」。下平井（現石和町）喜庭が山王社奉納句合の事に付来訪。元ざねより消息があつて逢坂の清水といへる所にての三句、

「望のあふ坂の清水を拝みけり 元ざね」「雨ふらばふれ宵過の銀河 同」「玉まつり露の千種を立ながら 同」。元ざねの息西松

少年大人のせうそこ携えて来訪。成川・亀六ふたりのぬし武江に赴くを送る。「いざ月の形に縮ねん花すき」。(一八日) 縣令(代官)

黒川来訪。(一九日) 梅牛久々で来訪。午時から元斎・茂林・如柳三子同伴で来訪、鬼孫も西山から決り、午時過五吟にて歌仙興行する。

「幾歳も同じ馳走やたままつり 如柳」「さし入る月にくらき燈明 元斎」「むさゝびの声ぞと聞けば淋しうて 水(下略)」今夜和戸の百万遍念仏に参詣する。(廿日) 養老園主人の一周忌の法

筵に招かれ日暮れに帰る。臼井氏の家族田中へ転居の由、留主に過訪。(廿一日) 童歳来訪終日閑談する。(廿二日) 今井(現石和町)

の浄光寺の前上人隠寮落成祝に招かれ四吉を興行する。和鳴上人はことし草庵を結びて、ひたぶるに妙法を観じ、折にふ

れては風月の口ずさびもまめやかに聞えける、いと尊し。五七五の書写にはよけれ桐一葉 敲水

浅き井筒にさし覗く月

和鳴

連衆は百衆・童歳・元斎などで九吟歌仙を興行する。

(廿四日) 蛙橋・風条来訪。白桂・長瓜も入来、元斎・百衆・仙斧も入来して、六吟歌仙興行。「秋風や腸にしむ猿の声 白桂

岸漕ぐ舟に半輪の月

水(以下略)

(廿五日) 春潮・源泉過訪。(廿七日) 古岡東都へ贈るせうそこ携えて来訪。(廿八日) 白亀来訪。五民息小石和往返過訪。花青七名

八牀の盪觴を問はる。引蝶来訪。(廿九日) 引蝶うかい山に泊り今日過訪。谷水・和好東屋参詣で過訪。白桂亭からうたひ本来る。平坡ぬしが椿堂の喪にこもり居らるるを訪ふ。「忘れじな枕あふぎし古扇 水」

(八月朔日) 午後石和へ往く。浦賀の鍊石からの消息に、「初秋やこちらむきたる岸の船」など五句届く。鬼孫の令弟来訪する。(二日) 山泉・元斎・谷水・白桂・胤柳来訪。(三日) 岩泉山より善光

寺参詣の留主に、元ざね・細工人源国過訪。申刻帰庵。宜交・鬼徑過訪。天目山人来訪閑談。(四日) 筑路・季言来訪夕陽三洞庵を訪

い、夜、谷水を訪う。(七日) 駿河の風青来訪。「苗代や案山子の形のまだ寒き 風青」「荒畠にただ青風の杉葉哉 同」(八日) 春

貝居士の大祥忌に招かれる。露敬過訪。今夜、十節・巴人・魚道・仙鳥・元ざね・茂林・仙斧同伴して来り、先夜三五亭で残った歌仙

を満尾する。(九日) 柊里の信濃の山家の湯から帰るを、元斎・仙歩・茂林ら平橋庵で待受けた。露敬・潮平と共に三吟歌仙一折興行

する。「植込の奥も明るし月の庵 露敬」「芋茹る間をしばしうたた寝 水(以下略)」(一〇日) 伴真章が伊勢神宮の遷宮に参拝す

るのを送別する。「眺め倦かじ二見に二夜や秋の月 水」真章は「立帰り都のつとにかたならなむいく海山の秋の眺を」を短冊に残し

た。元ざね・義隣来訪。夜柊里亭を訪う。(一一日) 伊賀国西明寺村布州が過訪。さかみや平七来訪。露敬小石和よりの帰りを泊る。(一

二日) 定会百韻興行。「蚊を見て都出でしか赤とんぼ 水」「閑屋の軒にわたる秋風 潮平」今夜白桂・鴉路泊りて夜話する。(一三日) 白

桂淹留、百衆・元斎・谷水来訪。五人にて歌仙興行する。「冷々と月さし入るや鳶の窓 石朵」「糸なき琴に通ふ鹿の音 水」

(一四日) 巴人・吉田の雀我過訪。宜交に橋立明神奉納額を渡す。谷水来訪。「笹垣を借りて淋しからず瓜^{くだ}雀我」。嵯峨の重厚東都から消息来る。「白梅の月夜祈らん蟻通 重厚」「桜人世界は花と成りにけり 同」「影うつす窓の若葉や角盟 同」「夏衣わたくし雨に濡てみん 同」の五句がある。重厚は更に続けて、「二白此度新類題撰集仕候間其道の人々句々集めて下さるべく候。尤も書林存候者入料に及び申さず候。御老人をはじめ数多御のぼせ下さるべく、撰者は今の落柿舎太溪俗名山本三河守と申し候、京寺町押小路橋屋治兵衛方迄御越下され候へば届き申候。」と句を募集している。

(一五日) 「名月や限なきものは我白髪 氷」雨降りて本意なく口号、「名月や降るものは雨か白玉か」(一六日) 西山秋水来訪、扇風留主に來訪。今夜夏音舎(柊里)に招かれて歌仙興行。「既望やいざいも粥の喰競 氷」「旅の咄の尽ぬ長き夜 柊里」米珠から文通。「鞠垣へこぼれて来たり萩の花 米珠」(三句略)(一七日) 五燕・白亀來訪。(一八日) 麦林忌。独吟首尾十六句を手向けぬかづく。

(一九日) 百樹・竹曦(表徳を五倉に改める)茂林・素毛・柊里・巴人・魚道・元ざね等、前三日柊里亭の歌仙を継ぎて満尾す。(廿日) 元斎過訪、尋古・念仏庵來訪。百朶上人甘利へ出行につき、葛飾の用など言伝を依頼する。この頃は師門瑟と甲斐の門弟との連絡は主として敲氷がしていたと思われる。(廿三日) 白亀・一洞・可見・三枝・桂舟來訪。

「神垣は落葉の上に落葉哉 白亀」

(廿五日) 桂舟田中より帰り過訪。山本助三郎訪れ、本居氏読ける歌の物語をする。梅花斎主人の病氣を訪ふ。留主に無人來訪し、石

森村孝女の伝を残し置く。(廿七日) 桂舟過訪。尺五郡内吟行のよして閑談時を移した。百朶上人中郡かへき過訪。(廿八日) 八代へ行く。凌冬昨日下午へ湯治に発足のよし。信州並木氏兩人逗留にて閑談。夕陽に帰庵する。(廿九日) 洛からの蝶夢の消息に、「聖護院の皇居に近ければ、初鶏や内裏にならふ里の春 蝶夢」「春興あは雪やうづもるゝ葉に起きる草 同」「西行上人六百年忌 双林寺にて、けふ逢ふも命なりけり花のもと 同」右二月廿六日発した手紙が近き比到来。(晦日) 谷水来訪。(以下都合により省略)

二 俳諧活動の考察

敲氷は天明五年・六年・七年・八年と甲斐を離れて俳諧行脚をすることはなかった。彼は老を自覚し始めると共に、甲斐の門弟に指導をするだけで多忙な日々となったからであろう。寛政元年もこの状況は変化していない。

(一) 平橋庵の月次会から門弟主催の俳諧興行へ

宗匠にとって最も重大なのは月次会であろう。寛政元年(天明九年)には閏六月があり一〇月一二日が芭蕉忌法筵となるので、二回の月次会が催された。定例日は一二日を原則とするが、七月は二日に催された。月次会で百韻興行は例年のように守られている。一月初会の連衆は三十一人で、二月・三月は一七人、七月は一五人、九月は一六人である。一月初会の連衆数は天明七年が二〇余人、同八年が三〇人であるから、恐らく三十一人は安定した人数と考えてよい。他の月の連衆は比較する記録はないが、一五人から一七人の間と考えてよいだろう。これだけの連衆を指導するのは極めてのんびりした活動のように思われるが、そうではない。月次会の百韻興行には、

俳諧の規則を十分に理解し、相当に努力して得た表現力を持つことが要求されるので、いわば選ばれた俳人達の集合であったと見るべきであろう。この月次会以上に敲水が重視していた俳諧興行には五月二十九日の朱黒忌追善興行、一〇月一二日の芭蕉忌法筵と八月一八日の麦林忌興行があるが、これらについては又触れることにしたい。上述の月次会とは別に、平橋庵や門弟などの許で、敲水が宗匠として指導する俳諧興行が行われていた。まず管見に入ったものを列挙して見よう。

一月八日、加茂の梅花齋初会。二月一〇日、童歳を迎え両吟歌仙。
二月一五日柊里・元斎・素麟との歌仙興行。同夜素毛と歌仙一折。
二月廿二日謂川と両吟歌仙一折。二月廿五日三洞庵で聖廟法業百韻。
二月廿八日柊里亭法筵歌仙。三月一六日元ざね亭で歌仙興行。三月廿三日柊里亭三吟歌仙。四月四日来雪亭三吟歌仙。五月五日官友舎の諸子に誘われ岩泉山大悲閣で歌仙一折。七月一二日巴人亭歌仙一折。七月一五日元斎・茂林・如柳・鬼孫と五吟歌仙。七月廿日養老園主人一周忌法筵。七月廿三日今井浄光寺の前上人（加嶋）の隠寮落成に九吟世吉。七月廿四日平橋庵で六吟歌仙。八月一六日夏音舎主人に招かれ歌仙。一月廿四日うかひ山初会。

この外、「八月朔日石和に行く。」「八月四日三洞庵を訪ふ。」「夜谷水を訪ふ。」など記されているのも俳諧興行があったと考えてもよいと思われる。以上のように一月から八月末までに二四回の俳諧指導を敲水が行っていることは、年間では月次会を除けば三六回にわたるのであり、平均すれば月三回の俳諧指導ということになる。しかも比較的少人数を対象として丁寧な個別的な指導であるから、その効果は多きく、門弟主催の俳諧興行が流行するのであった。

(2) 来訪者への指導と訪問による指導

座右稿には平橋庵を訪れた弟子や知人の記録も明確で、持参した発句なども掲載されている。弟子たちは自作に対して批評して貰い個別的指導を受けるためには師を訪問するのが最もよい手段である。そのような目的を持って訪問した人々を来訪者と呼び、他への用事のかたわら訪れた者を除いて次に掲げてみよう。一月一七日蔵六。同廿日柊里。同廿六日童歳。同廿九日桑里。二月一四日甫秋。同一六日柳美。同一七日池月堂・樓堤。同一八日運水。同廿六日仲亮。四月廿七日引蝶。五月八日柊里・元ざね。同廿三日青羊。六月廿四日運水。七月朔日引蝶。同一日吟朝。同一五日蔵六。同一九日梅牛・元斎・茂林・如柳。七月廿七日古岡。同廿八日白亀・引蝶。八月朔日鬼孫令息。同二日元斎・谷水・白桂・胤柳、同四日筑路・季言。同七日風国。同一四日谷水・省我。同一六日秋水・扇風。同一七日五燕・白亀。同廿日尋古。念仏庵。同廿三日白亀・一洞・司見・三枝・桂舟。同廿七日尺五。同晦日谷水。以上が個別的指導の実態であった。序に述べれば右に列挙した弟子たちは俳諧に深い関係をよせている俳人が多いが、それとは異なって、一月と七月一八日には縣令黒川が平橋庵を訪れているし、富田山寿徳院主が『蒙求』を携えて訪問し、四月五日・八月三日には、心学の天目山人が訪れ、伴真章の伊勢遷宮参拝を送ったり、八月廿五日には訪れた山本助三郎が本居氏の読んだ歌について語ったりといった種々の来訪もある。それにしても上記四八名の弟子の個別的な指導をするのは、並々ならぬエネルギーを要求されることであった。そうした中に七月廿八日弟子の花青から七名八昧の濫觴を質問されたような場合は、敲水も教える喜びを感じたに相違ない。わざわざ質問を記している。

文通による弟子から敲氷への質問は極めて少ない。文通は久瀧をわびたり身辺の報告や見舞などを兼ねて発句などが掲げられているものが多い。寛政元年一月から八月までに文通は二〇通に及んでいるが、門瑟門の再蝶・米珠・乱竿・霜後などのもの、春沢・尺五・阿老・拾露・自徳・鍊石など国外の者からの文通が多い。八月廿九日の洛の蝶夢から消息の後に、敲氷は「右は二月廿六日発であるが近き比到来。」と記している。これは特例かも知れないが文通は極めて時間が必要としたから、指導を受けるには不便だった。

更に敲氷は来訪者に対する指導と共に、自ら出向いての指導をしている。門弟などでは俳諧興行がある時に、出向いて指導したことは既に述べたが、一月一三日牧笛庵に行く。一月廿八日府下へ行き夜に入りて帰庵す。二月八日後藤氏の許へ行き夜話。三月三日石和・二宮・八代を回って夜帰宅。三月一六日山梨一丘閣を訪ふ。三月廿二日求風同伴で八代へ行く。五月廿二日八代に行く。八月朔日午後石和へ行く。八月四日三洞庵を訪ふ。夜谷水を訪ふ。これらは自主的積極的に指導しようとする意図を持つものと認めてよいであろう。そうした姿勢が俳諧向上の支えとなっていると思う。

(3) 敲氷の作句態度と奉納句

天明九年一月二日の初会百韻興行は立句を師抱山宇門瑟の「庫裏の夜は粥から明けて梅の花」をいただき、脇句は敲氷が「解ける筧に本末の水 氷」を付句して、脇起百韻となっている。天明五年・六年には、脇起百韻を師門瑟の許に贈り、門瑟の加点を乞うている。それは宗匠としての自己の指導した作品を更に師の評価を得ることによって確かめ向上しようという態度である。天明九年初会のこの脇起百韻は加点を得た証拠はないが、精神は同一だったと思

われる。一月一二日の芭蕉翁忌に際し、「俗談平話を正すといへるをしへの仰げはいよいよ高くいよいよかたし」と述べて、一筋に芭蕉の教えを求め続けていた。乞われて敲氷が門弟や知友に贈った賀句や悼句が十八句あるが、平常の言葉を使って人の心情を動かすものが多い。例えば寛政元年一月晦日駿河の郡斎にある息子に招かれて帰る風恵坊への送別吟「旅笠の行衛や富士の横霞 敲氷」や三月一〇日の柏下坊の追悼句「名残をしき御文や帰る雁の声 敲氷」をよく味わってほしい。

既に敲氷の名は甲斐の内外に知られていたが、寛政元年だけでも、その八月までに人々の勧進に応じた句は八句に及んでいる。

「三月三日閻魔堂奉納跋勧進。同九日亀石勧進東屋社奉納額跋。同廿四日庄木社奉納和好勧進。同廿六日筑路願主御嶽山奉納。六月七日白野天満宮奉納句勧進。七月九日四日市知笑勧進、諏訪神社奉納。七月一五日下午井喜延勧進山王社奉納句合。八月一四日宜交に橋立明神奉納額を渡す。」などと世間での評価の高さを十分証明する。

なお「座右稿寛政元己酉歲孟秋」に八月一四日嵯峨の重厚が東都（江戸）から敲氷に消息として発句四句を贈り、二白として、「新類題撰集を編集するので、その道の人々の句を集めて戴きたい。書林が存じている者は入料に及びません。御老人をはじめ数多の句をお送り下さい。撰者は今の落柿舎太溪、俗名山本三河守です。京寺町押小路橋屋治兵衛方迄お送り下されば届きます。」と記されている。重厚は敲氷の俳諧を充分に知っていたの依頼である。この新類題撰集は、寛政五年に新類題発句集蝶夢編、橋屋治兵衛板として出版された。この書物に敲氷の発句が入集しているのは言うまでもない。

（市史編さん専門委員）